

日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育学
研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に
関するプロソポグラフィ的研究 (9)

—1980年以前の大阪大学文学部・人間科学部スタッフのバイオグラフィー—

鈴木 篤

A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational
Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (9)
—Biographies of the Staff Members of the Faculty of Literature and that of Human
Sciences of Osaka University in or before 1980—

SUZUKI, Atsushi

大分大学教育学部研究紀要 第42巻第2号

2021年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 42, No.2, March 2021

OITA, JAPAN

日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育 学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の 一側面に関するプロソポグラフィ的研究 (9)

—1980年以前の大阪大学文学部・人間科学部スタッフのバイオグラフィ—

鈴木 篤*

【要 旨】 本論文では「プロソポグラフィ」の手法を用いて、大阪大学文学部・人間科学部に勤務した教育学研究スタッフの伝記的データを収集し、それら相互の比較を通して、集団間・時期間の共通性と差異を確認するための準備作業を行った。大阪大学文学部・人間科学部という事例において、彼らのアカデミックなライフコースに着目し、活字化された資料を用いている。

【キーワード】 プロソポグラフィ 教育学研究 大阪大学 歴史

I 問題の所在と研究方法

本稿は鈴木(2018a)によって提起された課題に応えるべく鈴木(2018b)から鈴木(2020b)までで明らかにされた知見に対し、大阪大学文学部・人間科学部に勤務した教育学研究スタッフの事例を明らかにすることで、研究上の貢献を試みるものである¹⁾。研究方法は鈴木(2018a)で示された通り、プロソポグラフィの手法を用いてあくまでも活字化された資料のみを使用しながら、検討対象高等教育機関に在籍した教育学研究スタッフの研究活動を取り上げ、制度面・スタッフ面におけるその発展の概要を描出することとする。そのことにより、今後、日本における教育学研究の歴史的発展過程に関するより詳細な研究が生み出されるための契機をもたらすことを目指したい。

日本の高等教育機関における教育学研究スタッフ設置状況の歴史的変遷については、①1886年～1901年(帝国大学内の教育学講座、高等師範学校、女子高等師範学校がそれぞれ一つずつ揃った時期)、②1902年～1918年(帝国大学内の教育学講座、高等師範学校、女子高等師範学校がさらに各一校増設された時期)、③1919年～1943年(帝国大学内の教育学講座がさらに増設されるとともに、文理科大学が2校設けられ、教育学研究スタッフが大幅に増加した時期)、④1944年～1948年(高等師範学校・女子高等師範学校が増設されるが、敗戦とその後の混乱を迎える時期)、⑤1949年～1965年(新制大学の創設と戦後体制の確立期)、⑥1966年～1980

令和2年11月2日受理

*すずき・あつし 大分大学教育学部発達科学教育講座(教育学)

年（学芸大学理念の転換と新構想大学の設置）の6期に区分することができよう。1980年度までの着任者を対象とする理由は、新構想大学としての筑波大学の開学（1973年）と東京教育大学の閉学（1978年）を経て、現在の教育学研究における制度的体制が一定程度整った時期としてこの時期が重要な意味を持つためである（時期区分はいずれも年度）。

本稿では「大阪大学文学部・人間科学部における教育学研究スタッフ」という範囲に対象を限定し、プロソポグラフィの作成を試みる。同機関の前身は北海道帝国大学や名古屋帝国大学と同様、戦前期には文系学部を持たなかった旧帝国大学であり、教育学部を設立する基礎のないところに教育学部を創設することとなった事例である。分析対象者は大阪大学文学部の創設された1949年から、1972年の人間科学部の創設を経て、1980年度までの着任者とし、(比較的長期的な勤務を前提として採用が行われたと考えられる)講師以上の職位での勤務者とする。

II 各機関の歴史と研究スタッフ

1 大阪大学文学部・人間科学部の歴史

大阪大学人間科学部は1972年5月に創設された学部であるが、その教育学研究スタッフの多くは大阪大学文学部の教育学系講座を基礎とするかたちで着任したものであった。戦前、大阪帝国大学には文系学部が設けられていなかったが、名古屋帝国大学の場合と同様に戦後、新制大学の発足直前に、大学設置認可申請書が必要とならない間に駆け込むようなかたちで文系学部が設けられた。詳しく見ると、大阪帝国大学には1948年9月に法文学部が設置され、さらに1949年5月にはこの学部を母体として文学部、法学部、経済学部が設置されたのである。このうち文学部には教育学系講座が設けられ、1953年には大学院文学研究科、そして1976年には大学院人間科学研究科も設置された。

収集した情報・資料を分析した結果、大阪大学文学部には以下の11名、人間科学部には以下の13名の教育学研究スタッフの勤務が確認される。

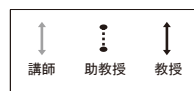


図1 凡例（図2～3）

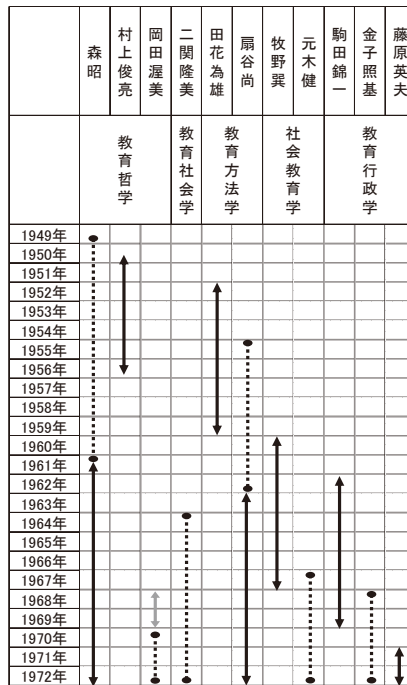


図2 大阪大学文学部に勤務した教育学研究スタッフ

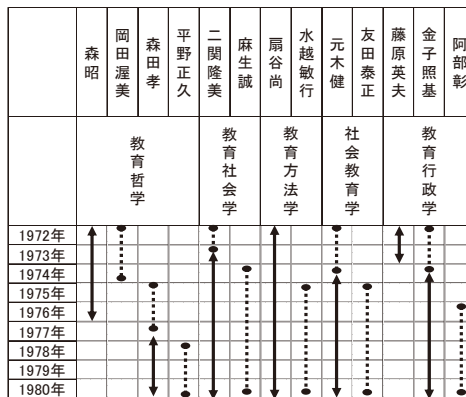


図3 大阪大学人間科学部に勤務した教育学研究スタッフ

2 大阪大学文学部に勤務した研究スタッフ

本研究における情報・資料収集作業からは以下の通りの研究スタッフ名とその詳細が明らかになった。

1) 教育哲学領域

森昭（1915年10月30日鹿児島生，1976年12月18日没）は1936年4月から1940年3月まで京都帝国大学文学部（哲学科）で学び，1940年4月からは同大学院で研究に取り組ん

だが、同じく 1940 年 4 月からは京都帝国大学文学部の副手も務めた。その後、大阪高等医学専門学校の助教授（1942 年 9 月から 1949 年）、教授（1949 年 4 月から）を務め、1946 年 4 月からは関西学院大学法文学部の助教授となっている。大阪大学文学部では非常勤講師（1949 年 5 月 31 日から 11 月 29 日）、助教授（1949 年 11 月 30 日から 1961 年）、教授（1961 年 8 月から 1972 年）として勤務し、その後、大阪大学人間科学部においても教授を務めた（1972 年 5 月から 1976 年 12 月まで）。1952 年 10 月から 1953 年 12 月までは DAAD 第一回給費留学生としてドイツ連邦共和国に留学している。1962 年 2 月 1 日には学位論文「教育人間学」により大阪大学から文学博士の学位を授与されている。著作には論文「教育哲学の根本問題」（『教育学研究』、1947）や論文「歴史的生命的教育哲学」（『教育学研究』、1947）、『教育哲学序論：教育哲学への限界状況』（蕉葉書房、1948）、論文「実験主義の哲学と教育理論」（『教育学研究』、1952）、論文「試案としての教育哲学：教育哲学への教育人間学的序説」（『教育学研究』、1960）、論文「教育哲学における教育研究の立場と方法：19 世紀後半から第 2 次大戦まで」（『教育学研究』、1961）、『教育人間学：人間生成としての教育』（黎明書房、1961）など教育哲学や教育人間学に関するもの、論文「カリキュラム構成の世界観的考究」（『教育学研究』、1949）や『教育理想の哲学的探求』（黎明書房、1948）、『新教育の哲学的基礎』（福村書店、1949）など教育内容や教育目標の哲学的基礎付けに関するもの、『教育の実践性と内面性：道德教育の反省』（黎明書房、1955）や『みんなの願う道德教育』（黎明書房、1958）、『みんなで進める道德指導：自主的な実践への足場』（黎明書房、1959）など道德教育に関するもの、『アメリカの大學：ジュニア・カレッジの提唱』（黎明書房、1949）や『ドイツ教育の示唆するもの』（黎明書房、1954）などアメリカやドイツの教育に関するもの、『現代教育の動向と進路：「社会建設の人間教育」のために』（黎明書房、1949）や『教育とは何か：民族の危機に立ちて』（黎明書房、1951）、『未来からの教育：現代教育の成立と課題』（黎明書房、1966）など教育と社会の関係に関するもの、『ジョン・デューイ』（金子書房、1951）や『経験主義の教育原理』（金子書房、1952）など英米系の教育思想に関するものなどが存在する。

村上俊亮（1901 年 4 月 28 日宮崎生、1977 年 3 月 19 日没）は東京帝国大学で学んだ後（期間・学部不明）、文部省に入省し、嘱託（普通学務局）（1927 年*²⁾）、嘱託（調査部）（1928 年*から 1932 年*まで）、嘱託（教育調査部）（1933 年*から 1941 年*まで）、大臣秘書官（1942 年*から）を務めると同時に、1927 年 7 月から 1929 年 4 月までは東京高等師範学校でも嘱託を務めている。その後、国立教育研究所において研究員（1949 年 6 月 1 日から 1951 年）、事務代理（1951 年 3 月 22 日から 1952 年 1 月 22 日）、所長（1952 年 1 月 22 日から 1956 年 10 月 22 日）を務め、1951 年 2 月 6 日から 1956 年まで大阪大学文学部に教授として勤務した。その後、東京学芸大学学長（1956 年 10 月 22 日から 1961 年 11 月 9 日まで）、青山学院大文学部教授（1961 年*から 1970 年*）、芦屋大学教育学部教授（1969 年*から 1976 年*）などを務めている。著作には『陶冶論』（最新教育研究会、1929）や『陶冶の基本問題』（目黒書店、1931）など陶冶に関するもの、『学校教育の心理』（目黒書店、1932）など教育心理学に関するもの、『民主主義教育の基本理念』（民主教育協会、1956）など戦後新教育に関するものなどがある。

岡田渥美（1933 年 1 月 6 日生）は 1957 年まで京都大学教育学部で、1963 年まで同大学院で学んだ後、大阪大学文学部において助手（1963 年*から）、講師（1968 年 4 月から 1970 年 3 月まで）、助教授（1970 年 3 月から 1972 年まで）として勤務し、1972 年*から 1974 年*

までは大阪大学人間科学部の助教授も務めた。それと同時に京都大学教育学部でも助教授（兼任）（1973年4月から1975年）、助教授（1975年4月1日から1984年3月31日）、教授（1984年4月1日から1996年3月31日まで）として勤務し、その後は神戸女子大学文学部の教授（1996年*から2003年*まで）となった。著作には論文「Th.Elyotの「為政者」教育論とヒューマニズム：イギリス近代政治人「ジェントルマン」の理想生成」（『京都大学教育学部紀要』、1965）や論文「モアの「ユートピア」教育論とヒューマニズム：<ジェントルマン>理想の生成と関連して」（『待兼山論叢』、1967）、論文「「平等」問題としてのパブリック・スクール」（『大阪大学人間科学部紀要』、1975）、論文「イギリス教育史より見たエラスムスとその「キリスト教的ヒューマニズム」」（『京都大学教育学部紀要』、1982）、論文「トマス・アーノルドの学校改革：その理念と実践」（『京都大学教育学部紀要』、1984）などイギリスの教育と思想の関わりに関するもの、「R.H.トーニーの「成人教育」思想：「教育における平等」に関する一考察」（『待兼山論叢』、1969）など成人教育に関するものなどがある。

2) 教育社会学領域

二関隆美（1921年10月27日生、1993年3月13日没）は1942年4月から1944年9月まで東京帝国大学文学部で学んだ後、東京第三師範学校の助教授（1947年3月から1949年まで）、東京学芸大学学芸部の助教授（1949年6月から1964年4月）、そして同時に青山学院大学文学部の助教授（期間不明、1950年*は助教授として勤務）を経て、大阪大学文学部に着任した。同地で助教授（1964年4月から1972年まで）を務めた後、大阪大学人間科学部において助教授（1972年5月から1973年まで）ならびに教授（1973年9月から1985年3月まで）として勤務している。1985年*から1992年*までは甲南女子大学文学部の教授を務めている。著作には論文「教育病理の概念化について：その視角と条件」（『教育社会学研究』、1975）や論文「教育の社会変革機能について」（『東京学芸大学研究報告』、1958）など、教育と社会の関係に関するもの、論文「青少年・成人両世代の価値意識の傾向：中・高校生とその両親および教師のばあい」（『青少年問題研究』、1965）、論文「母親の教育態度と子どもとの関連：教育ママの子はどんな子か」（『青少年問題研究』、1971）、論文「青年文化の問題：青年社会学のための序説」（『大阪大学人間科学部紀要』、1975）など子どもや保護者、教師の意識や文化に関するものなどがある。

3) 教育方法学領域

田花為雄（1896年8月山形県生、1983年7月19日没）は東京帝国大学文学部を1922年に卒業し、同年、千葉県女子師範学校に勤務した後（退職年不明）、熊本県女子師範学校での勤務を経て、京城帝国大学京城帝国大学の助教授（1927年7月6日から1929年*まで）および教授（1930年*から1945年まで）、埼玉大学教育学部の教授（1949年6月から1952年4月まで）ならびに弘前大学教育学部の教授（期間不明、1950年*の在職を確認）を経て、大阪大学文学部の教授（1952年4月1日から1960年3月まで）に着任した。定年後、青山学院大学文学部（1963年*から1965年*まで）ならびに芦屋大学教育学部（1966年*から1976年*）において教授を務めている。1962年2月1日には学位論文「ガウディヒ派教育学の研究」により大阪大学から文学博士の学位を授与されている。著作には『西洋教育史研究：廿世紀初期独逸』（新思潮社、1956）や『ガウディヒ派教育学』（新思潮社、1962）などドイツの教育史や教

育思想に関するもの、論文「児童福祉運動に対する学校の協力」(『教育学研究』, 1950) など福祉と教育の関係に関するもの、論文「教師苦悩と学級規模」(『甲南大学文学会論集』, 1960) など具体的な教育問題に関するもの、論文「李朝仁祖王代の郷約教化」(『朝鮮学報』, 1968) や『朝鮮郷約教化史の研究』(鳴鳳社, 1972) など朝鮮教育史に関するものなどがある。

扇谷尚(1917年5月3日生)は1940年から1942年9月まで東京帝国大学文学部で学んだ後、東京府女子師範学校および東京府立第二高等女学校の授業嘱託(1942年9月から)、東京第一師範学校の助教授(1944年3月から1950年*まで)、東京学芸大学の助教授(1949年8月から(※『東京学芸大学五十年史』では1951年3月から)1955年4月まで)を経て、大阪大学文学部の助教授(1955年4月1日から1963年)ならびに教授(1963年4月から1972年)に着任した。大阪大学人間科学部でも教授(1972年5月から1981年3月まで)を務めた後、甲南女子大学文学部の教授(1981年4月から1988年*まで)として勤務している。2001年4月1日から2004年*までは大阪人間科学大学の学長も務めた。著作には論文「教職者の生活態度:いかに変化しつつあるか」(『教育社会学研究』, 1951)や論文「教職倫理の構造」(『教育学研究』, 1954)など教師の振る舞いに関するもの、論文「カリキュラム概念の再検討:個性尊重の教育を契機として」(『カリキュラム研究』, 1993)や論文「教育作用の主体:教材との関連性の問題」(『大阪大学文学部紀要』, 1962)など教育課程に関するもの、『アメリカの諸大学における一般教育』(民主教育協会, 1962)などアメリカの高等教育に関するものなどがある。

4) 社会教育領域

牧野巽(1905年2月20日生, 1974年11月3日没)は東京帝国大学文学部で学び(期間不明)、東京高等師範学校に勤務した後、1949年に東京大学教育学部に着任し、同年8月31日から1965年3月31日まで教授として勤務した。その間、1960年4月から1964年度までは併任の形をとりつつ1968年3月まで大阪大学文学部に教授として勤務している。1968年度は青山学院大学文学部の教授を務め、1969年*から1974年*までは早稲田大学文学部に勤務した。1947年8月18日には博士論文「儀礼及び礼記に於ける家族と宗教」により東京大学から文学博士の学位を受け、1954年7月10日から1955年7月30日にはアメリカのハーバード大学を訪問している。『支那に於ける家族制度』(岩波書店, 1935)など中国に関する民族学研究のほか、論文「人口移動と教育」(『教育社会学研究』, 1951)や論文「富士郡における地域社会と教育」(『教育社会学研究』, 1952)など地域の教育実態に関する研究、論文「高等学校と大学との連絡の問題によせて」(『教育学研究』, 1956)など大学入試の問題、論文「青少年問題と生徒指導」(『青少年問題』, 1964)など青少年問題などに取り組んだ。

元木健(1930年3月31日生)は1953年3月まで東京大学教育学部で、1955年3月まで同大学院人文科学研究科において学んだ後、所員として国立教育研究所(1955年12月1日から1967年3月31日まで)で勤務している。1967年4月から1972年までは大阪大学文学部の助教授を務め、その後、大阪大学人間科学部の助教授(1972年5月から1974年まで)および教授(1974年11月から1993年4月まで)として教鞭をとった。定年後は、川村学園女子大学教育学部に勤務し(1993年*1997年*までは教授, 1998年*から2001年*は理事・教授, 2002年*からは理事)、同時に大阪経済法科大学教養部にも勤務した(1993年*は教授, 1996年*から1999年*までは客員教授)。著作には論文「産業教育における教育課程編成の方法論

の研究」(『教育学研究』, 1966) など教育課程に関するもの, 『技術教育の方法論』(開隆堂, 1973) など技術教育に関するもの, 『人権と教育: 社会啓発の基礎理論』(解放出版社, 1989) など人権教育に関するものなどがある。

5) 教育行政学領域

駒田錦一(1907年1月13日東京生, 2002年10月26日没)は1929年まで東京帝国大学文学部で学んだ後, 熊本薬学専門学校の教授(期間不明), 岡山医科大学の生徒主事(期間不明)を経て, 文部省に勤務した(期間不明)。その後, 国立教育研究所の研究員(1952年4月1日から1954年11月30日まで)となった後, 九州大学教育学部の教授(1954年12月1日から1962年6月30日まで)を務めた。大阪大学文学部に異動すると1962年7月から1970年3月まで教授として勤務し, その後, 1971年*から1984年*まで東京理科大学理工学部の教授を務めた。著作には論文「戦後における青年団運動の推移」(『九州大学教育学部紀要 教育学部門』, 1956) などがある。

金子照基(1930年6月23日熊本県熊本市生)は1953年3月に熊本大学教育学部を卒業し, 1953年4月から熊本女子短期大学の助手を務めたものの, 1957年3月まで九州大学大学院教育学研究科の修士課程で, 1960年10月まで同博士課程で学んでいる。その後, 熊本女子大学文・家政学部において講師(1960年11月から1963年まで)ならびに助教授(1963年5月から1967年*)として勤務し, 1968年に大阪大学文学部に着任した。同学部では1968年4月から1972年まで助教授を務め, 大阪大学人間科学部では助教授(1972年5月から1974年)および教授(1974年8月から1994年3月まで)となった。1994年*から2003年*までは安田女子大学文学部に教授として勤務している。1964年4月17日には学位論文「明治前期教育行政史研究」により九州大学から教育学博士の学位を授与されている。著作には論文「改正教育令と明治十四年の政変」: 教育政策の変質的展開についての一考察(『日本の教育史学』, 1959)や論文「天皇制教育の体制化過程: 森文政期を中心に一考察」(『教育学研究』, 1960)など明治期の教育政策に関するもの, 『生涯学習の振興と行政の役割』(風間書房, 1999)など生涯学習に関するもの, 論文「学校経営管理におけるリーダーシップ研究の視点」(『熊本女子大学学術紀要』, 1968)など学校経営に関するもの, 論文「公教育の管理と住民参加: ニューヨーク市の事例を中心に」(『大阪大学人間科学部紀要』, 1977)などアメリカの教育に関するものなどがある。

藤原英夫(1911年3月16日島根県生, 1997年1月13日没)は1935年3月に京都帝国大学文学部(哲学科)を卒業後, 同大学院で研究に取り組んだ。哈爾濱日本中学校で教諭として働いた後, 満州国吉林師道高等学校の助教授(1939年8月から), 静岡県浜松師範学校の教諭(1942年4月から), 北京私立浦仁大学教育学院の副教授(大東亜省派遣教員)(1943年4月から1944年11月まで), 島根県横田町の町長(1947年2月から1949年2月まで), 島根県地方労働委員会の事務局長(1949年12月から), 島根県教育委員会の文化課長(1950年4月から)ならびに教育次長(1951年8月から), 福岡県立福岡女子大学の助教授(1952年7月から1953年*まで)などを歴任し, 九州大学教育学部の助教授(1954年2月1日から1963年9月30日まで)となった。その後, 文部省において社会教育局社会教育官(1963年10月から)および社会教育局主任社会教育官(1966年5月から)を務め, 奈良女子大学文学部の教授(1967年*から併任, 1968年7月から1971年3月??まで専任)として勤務した後, 大

阪大学文学部（1971年4月から1972年まで）ならびに大阪大学人間科学部（1972年5月から1974年）において教授を務めた。定年後は甲南女子大学文学部において教授（1974年4月から1984年3月まで）として教鞭をとっている。著作には論文「明治初期の教育政策の歴史的意義に関する一考察」（『九州大学教育学部紀要 教育学部門』, 1963）など明治期の教育政策に関するもの、『社会教育体制と生涯教育』（協同出版, 1974）など生涯学習に関するものなどがある。

3 大阪大学人間科学部に勤務した研究スタッフ

本研究における情報・資料収集作業からは以下の通りの研究スタッフ名とその詳細が明らかになった。

1) 教育哲学領域

※森昭については既述のため省略。

※岡田渥美については既述のため省略。

森田孝（1929年2月5日生）は1952年3月に京都大学文学部を卒業し、1953年5月から神戸女子短期大学の講師を務めたが、その後、京都大学大学院教育学研究科に進学し、1959年8月まで在学している。大学院修了後、大阪府立大学教養部において助手（1959年1月から）、講師（1966年9月から1970年）、助教授（1970年8月から1974年*まで）を務めた後、大阪大学人間科学部において助教授（1975年4月から1978年）、教授（1978年2月から1992年3月まで）として勤務した。その後、1992年*から1997年*までは大阪学院大学国際学部の教授を務めている。1968年10月1日から1969年3月31日まではゲッティンゲン大学に留学をしている。著作には論文「シェリングにおける形而上学の形成」（『神戸女子短期大学学会論攷』, 1955）や論文「因果主張とその問題」（『神戸女子短期大学学会論攷』, 1957）など哲学に関するもの、論文「教育における平等の原理とその問題」（『教育哲学研究』, 1967）や論文「行動と価値：価値分析の方法論的基礎を求めて」（『大阪府立大学紀要 人文・社会科学』, 1961）など教育哲学に関するもの、論文「道徳言語の論理とその教育的課題」（『大阪府立大学紀要 人文・社会科学』, 1960）や論文「想念(Konzeptionen)の論理：人間の言語性とその形成についての一考察」（『大阪大学人間科学部紀要』, 1977）など言語の教育的意味に関するものなどがある。

平野正久（1939年1月24日生）は1964年3月に東京大学教育学部を卒業し、1966年3月に同大学院教育学研究科の修士課程を修了した後、1969年10月1日から1971年9月1日までは DAAD 奨学生としてテュービンゲン大学に学ぶ（受け入れ教員は Otto Friedrich Bollnow）。その後、日本学術振興会の奨励研究員（期間不明）を経て、1974年*から1976年*までは中央大学文学部の講師、1977年*は助教授となり、1978年*から1995年*までは大阪大学人間科学部の助教授、1996年*から1999年*までは教授を務めている。2000年*からは日本大学文理学部の教授として教鞭をとっている。著作には論文「大学における教育学教育の問題：西ドイツ教育学の自己革新運動」（『教育学研究』, 1971）や論文「教育学における研究方法論の問題：西ドイツ教育学界における近年の論義を中心に」（『教育哲学研究』, 1973）などドイツ教育学に関するもの、論文「教育人間学の課題と方法：H.ロートの所論を中心に」（『大阪大学人間科学部紀要』, 1993）や論文「生命科学の発展と「発達教育学」の課題：中村

桂子の「生命誌」概念の検討を中心に」（『大阪大学人間科学部紀要』, 1996）など教育人間学や発達教育学に関するもの, 論文「ルソーの市民形成論に関する一考察」（『鳴門教育大学学校教育実践センター紀要』, 2003）などルソーの思想に関するものなどがある。

2) 教育社会学領域

※二関隆美については既述のため省略。

麻生誠（1932年3月30日東京都新宿区生, 2017年4月24日没）は1955年3月に東京大学教育学部を卒業し, 同大学院人文科学研究科の修士課程を1957年に修了し, 1962年3月には博士課程を修了している。その間, 1961年1月からは日本育英会の専門員となり, 1964年4月から1966年までは東京学芸大学教育学部の講師, 1966年10月から1974年4月までは助教授として勤務している。その後, 大阪大学人間科学部に着任すると, 助教授（1974年4月から1980年まで）および教授（1980年5月から1995年3月まで）を務め, 1995年*から1998年*までは放送大学教養学部の教授, 1997年*から2001年*までは東京女学館大学の理事, 2000年*から2001年*までは関西国際大学短期大学部, 2000年*から2002年*までは関西国際大学の理事, そして日本女子大学の理事も務めている。著作には論文「近代日本におけるエリート構成の変遷」（『教育社会学研究』, 1960）や論文「明治期における高等教育諸機関のエリート形成機能に関する研究」（『教育学研究』, 1963）, 『エリートと教育』（福村出版, 1967）など明治期におけるエリートの歴史に関するもの, 論文「社会体制と教育」（『教育社会学研究』, 1964）や『近代化と教育』（第一法規出版, 1982）など教育と社会の関係に関するもの, 論文「後期中等普通教育における学校差の実証的研究」（『教育学研究』, 1965）や論文「高等学校教育の発展と高等学校研究の展開」（『教育社会学研究』, 1979）など後期中等教育に関するもの, 論文「能力の社会学」（『教育学研究』, 1972）など能力に関するもの, 『生涯教育論：生涯教育学の成立をめざして』（放送大学教育振興会・日本放送出版協会, 1985）など生涯学習に関するものなどがある。

3) 教育方法学領域

※扇谷尚については既述のため省略。

水越敏行（1932年5月13日生, 2019年1月1日没）は名古屋大学教育学部で学び（期間不明）, 大阪音楽大学短期大学部の講師・助教授（期間不明）, 大阪音楽大学音楽学部の講師（1966年*）ならびに助教授（1967年*から1968年*まで）を務めた。その後, 金沢大学教育学部に異動すると講師（1969年4月1日から1970年まで）および助教授（1970年3月1日から1975年10月1日まで）として勤務し, その後, 大阪大学人間科学部の助教授（1975年10月から1980年*まで）および教授（1981年*から1994年*まで）となった。1995年*から2002年*までは関西大学総合情報学部で教授として教鞭をとっている。1975年3月3日には学位論文「発見学習の研究」により名古屋大学から教育学博士の学位を授与されている。著作には論文「アメリカにおける発見学習についての一考察」（『教育学研究』, 1970）や『発見学習入門』（明治図書出版, 1970）など発見学習に関するもの, 『授業評価研究入門』（明治図書出版, 1982）や『授業研究の方法論』（明治図書, 1987）など授業研究に関するもの, 論文「放送教育の方法論を求めて」（『放送教育研究』, 1977）や『メディアを活かす先生』（図書文化社, 1990）などメディアを用いた教育に関するもの, 『総合的学習の理論と展開』（明治図書出版,

1998) など総合的な学習の時間に関するものが存在する。

4) 社会教育領域

※元木健については既述のため省略。

友田泰正 (1940年2月13日生) は1962年3月に広島大学教育学部を卒業し、1964年3月に同大学院教育学研究科を修了している。1965年10月からはシカゴ大学比較教育研究センターにおいて助手、1967年4月からは研究員を務め、1968年9月に広島大学大学院教育学研究科の博士課程を修了した。1968年10月から1971年までは広島県立農業短期大学の講師、1971年4月から1975年までは助教授を務め、その後、大阪大学人間科学部において1975年10月から1989年までは助教授、1989年8月から2003年3月までは教授として勤務した。2003年からは武庫川女子大学教育研究所において教授を務めている。著作には論文「大学入学者の地理的移動と地域別輩出率」(『教育学研究』, 1968) など大学進学に関するものや論文「学校外教育と情報化: 学習情報の提供とその課題」(『教育社会学研究』, 1992) など学校外の各種教育機関・施設に求められる情報発信に関するものなどがある。

5) 教育行政学領域

※藤原英夫については既述のため省略。

阿部彰 (1941年4月4日生) は1964年3月まで東北大学教育学部で学び、その後、1966年3月に同大学院教育学研究科の修士課程を修了、1970年3月に同博士課程を修了している。1970年4月からは国立教育研究所内の財団法人教育研究振興会に研究員として勤務し、1974年4月から1975年*までは大東文化大学文学部の助教授、1976年4月から1993年までは大阪大学人間科学部の助教授を務めた。1993年4月から2005年4月までは教授を務め、その後は帝京平成大学現代ライフ学部の教授として2006年*より勤務している。1971年1月27日には学位論文「文政審議会の研究」により東北大学から教育学博士の学位を授与されている。著作には論文「大正・昭和初期教育政策史の研究-1-: 政党内閣の成立と官立高等教育機関拡張計画」(『大東文化大学紀要 社会・自然科学』, 1976) や論文「政治構造転換期における学制改革案の形成とその特質: 「田中文相案」・「内閣調査局案」を中心として」(『教育学研究』, 1976) など戦前期における教育政策に関する研究や、論文「対日占領における地方軍政: 地方軍政部教育担当課の活動を中心として」(『教育学研究』, 1982) や論文「地方における占領教育政策の展開に関する研究序説」(『大阪大学人間科学部紀要』, 1978)、論文「対日占領における民間情報政策: 「ナトコ」による啓蒙活動の実態と背景」(『大阪大学人間科学部紀要』, 1983) など戦後占領期の教育政策に関する研究、論文「学習環境学研究序説: 学習条件整備の方向性」(『大阪大学人間科学部紀要』, 1996) や論文「「感性」を基盤とする学習環境の整備に関する試論」(『大阪大学人間科学部紀要』, 1998) など学習環境に関する研究などがある。

※金子照基については既述のため省略。

Ⅲ 小括 (本稿の結びに代えて)

本稿では大阪大学文学部・人間科学部に勤務した教育学研究スタッフの事例を明らかにすることで、一連の先行研究に対する研究上の貢献を試みた。集められた資料からは、大阪大学文

学部・人間科学部におけるスタッフ面での組織的發展過程ならびに各研究スタッフの伝記的データが明らかになった。もっとも、これらの伝記的データを基にした数量的分析などは紙幅の関係上、本稿では断念せざるを得なかった。また、それらの分析をもとに研究機関ごとの特徴や差異を明らかにする作業は、今後、他の研究大学ならびにその前身高等教育機関に勤務した教育学研究スタッフに関連するさらなる知見が一定程度蓄積されてはじめて可能となるものであり、現時点ではそうした研究の進展を待つこととしたい。

附記

本研究は科研費（19K02506）の助成を受けたものである。

注

- 1) 本稿の課題と直接的な関係を持つ研究ですでに公刊されているのは、東京大学教育学部、広島大学教育学部、東北大学教育学部、筑波大学教育学域、名古屋大学教育学部とそれらの前身高等教育機関に関する以下の諸研究である：鈴木篤（2018a）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (1)—Method and Process of This Study and Limits of Previous Related Studies—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 39 卷 2 号、191-210 頁、鈴木篤（2018b）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (2)—Biographies of the staff members of Tokyo University and its Forerunner Institution in or before 1980—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 39 卷第 2 号、211-232 頁、鈴木篤（2018c）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (3)—Biographies of the staff members of Hiroshima University and its Forerunner Institutions in or before 1980—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 40 卷第 1 号、43-67 頁、鈴木篤（2019a）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (4)—Biographies of the Staff Members of Tohoku University and its Forerunner Institutions in or before 1980—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 40 卷第 2 号、227-239 頁、鈴木篤（2019b）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (5)—Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980 (1)—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 40 卷第 2 号、241-256 頁、鈴木篤（2019c）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (6)—Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980 (2)—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 41 卷第 1 号、27-42 頁、鈴木篤（2020a）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (7)—Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980 (3)—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 41 卷第 2 号、149-158 頁、鈴木篤（2020b）「日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の側面に関するプロソポグラフィ的研究(8) —1980 年以前の名古屋大学教育学部スタッフのバイオグラ

- フイー」、『大分大学教育学部研究紀要』第42巻第1号，13-28頁。
- 2) 大学一覧や大学職員録，官庁の職員録以外に確認する手段の見当たらなかった，年度単位の年号については*印を付している。

A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (9)

—Biographies of the Staff Members of the Faculty of Literature and that of Human Sciences of Osaka University in or before 1980—

SUZUKI, Atsushi

Abstract

In this paper, using the method called ‘Prosopography’, I collected biographical data of the staff members in educational studies in the Faculty of Literature and that of Human Sciences of Osaka University as a preparation to compare them to find the common characteristics and differences between groups and chronological periods. I concentrated on the course of their academic life and based my analysis on published materials concerning the case of Osaka.

【Key words】 Prosopography, Educational Studies, Osaka University, History